



## 島で楽しく暮らしながら 頼れる故郷をつくろう

●島で暮らしたい

島暮らしをしたいという都会の若い人がいる。実現すれば嬉しいことだ。筆者世代から見ればわざわざ都会から島の不便を忍ぶ生活に踏み込む魅力があるのかなと、一応は思う。

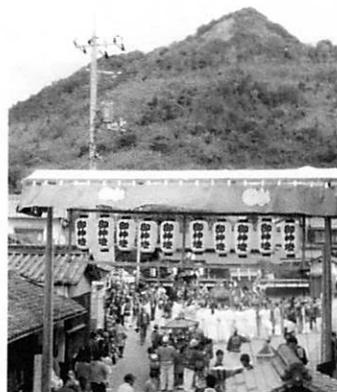
だが考えてみれば、筆者もまた若いころ故郷へ舞い戻ってきた。理由はいろいろあつたが、田舎で子どもを育てるのが動機の一つだった。

子どもが生まれ、育つ環境を見てみると田舎で育てた方がいいと思えたとし、若いから仕事は何とかなるとたかをくくっていた。育児を終え、なお都会暮らしがしたければまた出て行けばいいとも。楽天的というかノーマルというか、出世や地位には縁がないと決めてかかって居たからだと思う。

子供を産むからには一人で生きてゆけるように育てるのが親の責任なのを言うまでもない。ではいつまで責任を負うのか。それを趣味の野鳥観察が教えてくれる。

●自立を促す野生の知恵  
 野鳥には巣立ちという儀式というかステップがある。巣立ちとは鳥として生きるための世間への旅立ちである。巣立ちして間もないまだくちばしの黄色いあいだ親はせつせと餌を運ぶが、それはほんのわずかな期間だ。空を飛び、獲物を見つけ、捕

らえ、餌として消費するすべを、親鳥は短期間にやって見せながら教え、ある日突然親子の絆を解き放つ。すぎる雛を見返すこともない。



◆島の祭りは潤滑剤。人々の絆が固くなる

すべて野生の生き物にみるこの歯切れの良さは、一見酷薄に見える最も理にかなった愛の在り方だといつも思うのである。ひるがえって我ら人間界の子育ての有様はどうなのだろう。

●時代の子は次代の子  
 島で暮らしたいと願う若者にどういう思惑があるのかは知らないが子どもを田舎で育てたいというのがその目的の中にあるのなら大賛成。筆者に出来ることがあれば力を絞りたいとも思う。それはかつて筆者が故郷にしてもらったことだから。

わが町も高齢化の裏返しとして少子化があり、少子化は町として存続するにはとても大きなマイナス要因。できるならどういう形であれ若い人には帰ってきて、あるいは移住してほしい。

とはいふものの筆者が帰ってきた頃のように、そこで身過ぎ世過ぎに足りる職業が充分あるかと言え、残念ながらノーマルと言わざるを得ない現実だ。しかし、時代の子には時代に合った生計の道が必ず見いだせるのではないかと、楽天的にも思う。

●自分を見直す

島で楽しく暮らす。海や山で遊んだり、のんびり経過してゆく時間を楽しむのもいい。それのみならず、町を元気にし、若者に島で子育てをしたいと思わせる情報を外に向かって放つ楽しみも、当然あっていいのではないかと思う。

移住し食べてゆくための方途は、移住者当人の創意と工夫、責任にあるとしても、せめて空き家の提供とか、そうした情報の共有や発信とかは、次世代に夢をつなごう。我々年のいった者の責務としてとらえ直してみよう。

渡り鳥は千里の道を遠しとせず大陸と故郷ニッポンを往来する。うまし故郷なら人間世界の我が町にもそれがおきるはずだ。(平山和昭)

**BOOK 「奇跡の海」**  
 瀬戸内海周防灘は喪われたはずの生き物が居る奇跡の海だった。上関原発の建設推進に業者が作った「環境影響評価書」に対し、素晴らしい日本の自然と生物多様性を将来に手渡すために有志が手弁当で研究した成果「もう一つの環境影響評価書」が誕生する軌跡を紹介。30年原発反対運動をしている祝島の人々に通じる。  
 ●希望者に貸し出し可能です。

**秋の手仕事に物思う**  
 安藤朋生 茨城県

季節はすっかり秋。物思いに耽るにも手仕事を楽しむにも良い季節となりました。

私にとってこの時期楽しみな手仕事のひとつと言えば、大量に作る栗の渋皮煮。鬼皮を剥き易くするため水に付けること半日。栗に傷をつけないよう剥くこと大鍋2つ分。ここまでで1日が終わり完成！ってまでに3日はかかります。そして家族や友人が美味しいと言ってくれるとあの手間隙が何となくなくなるのだから不思議。何と言うか、出産に似てる？これでもかという陣痛に耐え、オギャー！と聞いたその瞬間あんなに痛かったことなどポロッと忘れるって言うでしょう？ちなみに安藤は出産前後の苦しい記憶が未だ消

えず、産みの苦しみに耐えられるのは食うことだけでございます。

先日まだまだ紅葉も早いというのに滝見のそばの蕎麦が食べなくなり母娘弟と、雨だというに出掛けて行った。名物の美味しい物が食べられるなら行列にも参加するし、1度食べてみたいと思ったら結構な時間を待たたりたりもしちゃいます。今やインターネットでなんでもお取り寄せが可能といったら、体重計となんて友達じゃなくなるユトリっぷり。恩師に自分に厳しくなるよう求められるのもむりもありません。

幸せなことに安藤には恩師が2人おります。相手はどう思っているか分かりませんが、36歳にして出会えた人生の師。恩師とよぶ以外に何と呼べるでしょう。奇跡的な出会いでもあります。そんな2人の恩師が有る

う事か共に手術をすることに。

私だけが2人を知り恩師同士は知り合いではない存在。手術部分こそ違えども重大さはどちらもどっちで1人は心臓、1人は脳に近い耳の中というから気が遠くなりました。連絡を受けたのも同じ頃。入院する時期も手術の日取りも1、2週間程のズレしかなかった。

何はともあれ、手術は無事成功し今は回復に向け調整中とのこと、安心しました。

自分自身、もしものことがあったらより良い医療を受けたい。そしてそう思うのは誰もなことと思っています。しかし実際は受ける治療や望みも様々なら、術の無さに苦渋することが出て来たり、全部が叶うわけではなかったりと葛藤するんだと思います。それならば残りの時間をゆったり過ごして逝きたい。

諦めではなく1つの選択として生の限りを穏やかに過ごせたら幸せではないでしょうか。

治療を受ける者だけでなく、それを見守る者にも時としてそうあって欲しい。そしてそこに向かう何よりも大切な事は様々な説明が不可欠なんだということではないでしょうか。

病状や手術の進め方だけでなく、看取る方・見守る方達に対するメンタル面へのサポートも大切な医療なんじゃないかと。

島に住みたいのお題から離れてしまいましたが、日本の”心の治療”はまだ高度とは言えません。だから島に移り住む人達が増えているのかもしれない。

島は大きなホスピタルなんてCMがありましたけど、正にその通りで、ゆったりと過ごす心にストレスは生じない。医療と言う名でないが治療力が島にはあるのかも。





## ♪カラスなぜ鳴くの？ 画一化と住民感情

### ■ひとつの町への道

合併してそれぞれ旧町村で行なわれてきた施策の多くは「ひとつの町」という立脚点で画一化されてきた。そうしなければならぬもの、無理にしくなくてもよいもの色々ある。我が町も小なりといえど四つの旧町村地区を行政区域にしている以上、当然だ。ところで各島々は何百年も独自の発展を遂げてきた。その町村が合併したのは、ひとえに中央政府のご都合主義に端を発しているのは平成の大合併劇をみても明らかだ。それぞれの自治体が心から望んで合併したのだとは言い難い。が、小異を捨て大同につかねば、財政のひ弱な自治体は政府の締め付けにあえば立ちゆかなくなるのも明らかだから住民は納得した。

### ■政治は利害の調整

「政治とは利害の調整だよ」と喝破したのは故田中角栄元首相だが、その一番弟子が先の政権交代で政権党の要職に就いたとき、豪腕と評される強権姿勢をちらつかせた。そのこともあってか党代表選に敗れ、今や政権党のアキレス腱の状態にある。まあ国政は脇に置くとして、我が町のような小さな町では施策の一つ一つを丁寧に町民に納

得させてゆく手間がが望まれる。

### ■町融和は住民感情から

政策はその殆どを理事者が立案し議会に諮り決定される。もちろん議会に諮る必要のない施策も当然ある。そのような小さなものが意外と町民の利害感情を刺激するものだ。そこを丁寧に調整してゆくことで町民の新しい町への一体感が固まってくるのではないかと思う。

### ■思いがけない不評噴出

例えばこのところずっと岩城地区や生名地区でくすぶっている不満、全町一斉に鳴らされる時報の問題は、本番前に一定の試行期間を設けたにもかかわらずいざ実施されるといつまでも町民の不評をかこっている。

先年、光ケーブルの全町域敷設が完了し町内が一つのネットワーク(LAN)になった時点で、新たに設置し直した防災無線装置と各家庭内にある告知端末器を使って時報を流すことになった。朝7時、昼12時、夕方5時、メロディは「七つの子」。ところが各地区で不評が噴出した。防災放送の聞こえない地区の存在や音質の悪さはそれに拍車をかけた。行政には想定外の反応だったのではないか。

### ■夫々の事情を尊重する

従来岩城地区では定時放送と組み合わせた時報で、5時、8時、12時、15時、17時、22時。メロディ「ミカンの花咲く丘」。生名地区では6時、12時、17時、22時。メロディ「赤とんぼ」。弓削地区では7時、12時、18時、メロディ「七つの子」。

メロディに関しては弓削地区

は弓削小学校の作詞・作曲者本居長与の代表作。岩城地区はミカン、レモンの島だからと、時間設定や思い入れはそれぞれだ。

その後弓削地区では自治会連合が時間変更を申し入れ17時が18時へと変更され現行となったと聞く。メロディを含めこれまた他地区民のひんしゆくを買っている。

## ときには行政側からテーマを出して

### ■町懇の在り方

時報は「慣れ」で済む話かもしれぬが島である各地区をどうしても統一しないと行政運営上都合がわるい話でもなかるう。したがって各地区住民が長年日常生活の目安としていたものを変更するというのなら、じっくり調整を図るべきだ。役所の担当者が協議して決めるやり方よりも、理事者と町民との懇談の場「町づくり懇談会(町懇)」などで、町側から時間等を提案

し意見を聞いてからという方法もあったらう。

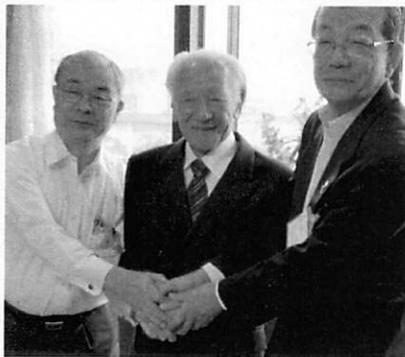
全ての人に都合のよいものはない。最後は多数意見の集約になるであろうが手を尽くしていれば町民の納得は得られやすい。

町懇は回を重ねるごとに住民の参加が減っている。今までのやりかたも見直し、事前に理事者(町)側からテーマを示し集中的に意見を聞く場にする方法論もあっていいのではないか。

(平山和昭)

## 菅井先生近況

写真・平成22年9月27日  
松浦市役所



右・友広市長  
中・菅井鷹島診療所長  
左・寺澤副市長

元「魚島村僻地診療所」所長・菅井健二医師は、その後も僻地医を歴任され、現在、大分県大野市三重町の高齢者施設で施設長をされている。最近長崎県松浦市の市立診療所へ赴任。一定期間の勤務の後また三重町に戻れる予定と聞く。八五才。日夜知らず働いては、年齢な

町内の役員をしている夫が神戸の防災センターを視察に出かけた。この夏も信じられない位の大雨が降り被害が出ている。他人事ではないと思つたのか我が町では自主防災の体制が出来つつある。

土産のチェックリストを片手に、夫とリュックに詰め直した。何年も前に詰めたままで乾電池は液漏れし、ばんそうこうも十円玉も変色している。

「万能ばさみは？」と私。さすがに夫が自慢げにサバイバルナイフを出して来た。新婚間もなく「これが欲しい」と。当時一万円くらいしたスイス製のやつだ。現実派のヨメは「いつ使うの？」「ありや便利で」と。買ってしまえばカチャカチャやっていたがいつの間にか私は忘れていた。懐中電灯はプリン振り返して使う電池不要のあれ。一応振ってみる。ラ

### 青木喜代子



と少し鼻高々に言ううと、「青木さん、神戸のようなのがきたら何をしてもだめよ」と涼しい顔をして言った。(くそ！アンタも中華街でおいしい焼売りを豚マンを求めて行列しただけか！)

備えあれば憂いなし、天災は忘れた頃にやってくるんだ。みんなチェック、チェック。



「ハイ、出来た！」と背負うとかなり重い。今はベッドの横でお守りのように鎮座している。一緒に視察に行った人に「我が家はチェックしましたよ！」

イターもカチャ、笛もピーツ。乾パンに黒鉛と。ああでもない、こうでもない遠足の前の晩みたいじゃと、不謹慎かも知れないけど、少し楽しみながら夫とチェックした。

♥いつもフェニックスニュースをありがとうございます。お元気ですか。ニュースによりましてロッジが再出発するということですが、仰せの通りここで何が行われるかが大切なときです。

(以前宿泊)川崎・羽生道雄(工業デザイナー)  
♥先日稲の収穫を終え、新米が出来ました。この夏は小雨で台風の影響も少なかったためか、収穫量は例年よりかなり多く、喜んでます。米の種類は今話題の「ひのひかり」です。見栄えは市販の米に比べて悪いのですが、結構おいしいです。精米した米をお送りしますのでご試食下さい。

三好町・Y・T(看護師)  
♥11月がすぐそこなのに夏が続いて沈黙の春が来そうで本当に不安。「激暑に敗れました。農作物全滅降参です。今年秋野菜のお届け不能。済みません、くやしいです。又来年。倉本聡 筆で書きなぐったような葉書が富良野から届きました。毎年じゃがいも、カボチャが届いていたの。いよいよ喰えん花を抜いて喰える野菜を植えんといかんかしら・・・。因島・青木喜代子(商店主)  
♥弓削通信フェニックスNo.5、今回は読み易いスタイルで気に入りました。赴任は短期です。仕事が終わったら三重町へ戻ります。

鷹島・菅井健二(僻地医)